

「異言」を理解する

ダグ・バチラー

トロイの木馬

伝説によると、ギリシャがトロイの町を10年間包囲したにも関わらず占領出来なかった時、ついに巧妙な策略に訴えることにしました。ギリシャ軍は退散するふりをして海岸に大きな木製の、勝戦祝いの贈り物に見せかけた馬を残して行きました。しかし実際、その贈り物の中には戦士たちが隠れていたのです。トロイの中に送られたスパイのシノーンはトロイ人を説得して馬を城壁内に持ってこさせました。そうすることによってトロイを不思議にも無敵にするというのです。その夜、シノーンは巨大な馬の中に隠れていた兵隊を解放しました。彼らはトロイの見張り人を倒して、ギリシャの兵隊たちのために門を開けました。そしてトロイは攻略され焼かれてしまいました。

異言に関する異なった解釈

トロイの木馬のように、敵からの贈り物は致命的なものとなり得ます。サタンは、美しく装った欺瞞によって、多くの人間を滅ぼすことに成功してきました。今日、悪魔は偽の聖霊の賜物、すなわち異教の形をとった異言の賜物を用いて、神の教会へ侵入し、内から滅ぼそうとしているのです。

私がクリスチャンになって間もなく、母に会うためにパームスプリングスからロサンゼルスにヒッチハイクをしていました。目的地までの途中、ペンテコステ派の優しい中年女性が車に乗せてくださいました。私が最近キリスト教へ回心したことをとても喜んで聞いてくださいました。運転しながら彼女は、「もう聖霊を受けましたか？」と私に尋ねました。

私は、その様な事を尋ねられたことがなかったので、彼女の質問に少し驚いていました。「そうですねー、受けたんじゃないかな」と、私は答えました。「確かに、私は、生活の中で神の霊を感じました。主は、多くの変化を私に与えてくださいました。麻薬、盗み、嘘、口汚い言葉遣い、その他いろんな事を止めるのを助けて下さったんです」。

「いえいえ、そのような事じゃないんです」と、少しイラついた様子で彼女は続けて言いました。「聖霊のバプテスマを受けましたか？異言を語りますか？」私は何か変だなという印象を受けました。

それは、私が長い間虜になっていた罪に勝利したことよりも、恍惚とした発声の経験をしたことがあるかどうかということの方に、彼女が関心を抱いていたからです。

しかしこの優しい女性は、私がクリスチャン経験の大事な要素を見失っているのだと確信していました。私は、議論の分かれる問題である、この異言について、この機会に徹底的に調べ始めました。私が初めて出席していたいくつかの教会はみな、カリスマ派でした。彼らは、恍惚とした異言を話すこと、すなわち「グロソラリア」と呼ばれる体験を信じる人々でした。その聖書研究のグループの新しい友人たちのほとんどが「異言を語る」人々でした。ですから、今から私が説明することは、私が直接体験した事、そして幾年かの研究をまとめたものです。

この研究の中で、人に歓迎されないことをあえて述べなければなりません。しかしまず初めに申し上げておきたいことは、私はカリスマ派の兄弟姉妹のそうした教えには意見を異にしておりますが、神はこれらの諸教会に多数の神の子をお持ちであることを確信しております。また、カリスマ派の人々の間でさえも、異言の賜物に関して非常に多くの異なった解釈があることを認識しておりますが、一つ一つに言及することは困難なため、概括的になってしまいますことをお許し下さい。私は人に対して闘おうとしているのではなく、誤りに対して闘おうとしているのです。傷つけるその同じ真理はまた、私たちに自由を得させることを約束するのです(ヨハネ 8:32)。

本当の異言の賜物

まず、定義について考えてみましょう。聖書の「異言」とは単に「言語」という意味です。

霊の賜物はみな、実際的な必要を満たすために神がお与えになったものです。異言の必要は何だったのでしょうか？

イエスは弟子たちに次のようにお告げになりました。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を教え、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、」(マタイ 28:19[欽定訳])。この命令は問題を引き起こしました。弟子たちは1つあるいは2つの言語しか話せなかったのに、どのようにして彼らは全世界へ行って伝道することが出来るのでしょうか？イエスの弟子たちは非常に賢明ではありましたが、そのほとんどの者は正式な教育を受けてはいませんでした。大いなる任命を遂行するために、イエスは彼らに聖霊からの賜物を与えるという約束をしてくださいました。福音を宣べ伝える目的のために、彼らが正式に学んだこともなく、また知らなかった外国語を話すという奇跡的で超自然的な能力が彼らに与えられたのです。

「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らは…新しい言葉(new tongues[欽定訳])を語り、」(マルコ 16:17)。イエスは、新しい言葉、すなわち言語が「しるし」となると言われました。この事は、これらの言語を話す能力が通常の言語学習の結果与えられるものではないことを示して

います。それはむしろ、それまで知らない言語で流暢に伝えるために瞬間的に与えられる賜物なのです。

聖書に記録された異言を語ることについての事例は3か所(使徒行伝2、10、19章)にあります。これらの事例を見れば、意見の分かれる、賜物に関するこの問題がより明確になるでしょう。

「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉(other tongues[欽定訳])で語り出した。」(使徒 2:1-4)。

火は力を象徴しています。神は、火の舌の形で、この賜物を送られました。それは、神が彼らの弱い言葉に力をお与えになるということを彼らが知るためでした。同様にかつて神は、パロの前に行ったモーセをカづけ(出エジプト 4:10-12)、また天の祭壇からの炭でイザヤのくちびるに触れました(イザヤ 6:6, 7)。

なぜ主はこの賜物を授けるためにペンテコステまでお待ちになったのでしょうか？使徒行伝 2:5-11 を見てみましょう。「さて、エルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちがきて住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集まってきて、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあつけに取られた。そして驚き怪しんで言った、『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか。…あの人々がわたしたちの国語で、神の大きな働きを述べるのを聞くとは、どうしたことか』」。

ペンテコステの日は、ユダヤ人の祭日で、過越の祭の後50日後に当たりました。熱心なイスラエル人は、エルサレムで礼拝をするために、ローマ帝国のあらゆる所から集まって来ました。神は、弟子たちに、異言の賜物を授けるのに、この時機を選ばれました。こうして、弟子たちが、訪問していたユダヤ人の生まれ故郷の国語で説教することが出来るようになるためでした。少なくとも15か国語のグループが、その日その群衆にいました(使徒 2:9-11)。その結果、幾千もの人々が改心しました。それからペンテコステの後、彼らは、今度は各自の国へ新しい信仰を持ち帰りました。

この事例からも、異言の賜物は、世界に存在していた異なった言語で福音を伝達するために与えられたということが非常にはっきりするはずです。

ある人々は誤って、ペンテコステの奇跡は異なった言語を聞いたり理解する賜物であったと言いました。それは、聞く者に与えられる聞くことの賜物ではなく、話すことが出来るようにするために信者に与えられた霊の賜物でありました(使徒 2:4)。それは聞く者のための耳の賜物ではなく、語る

者のための舌の賜物でした。しるしは聞く者の上にとどまった火の耳でなく、説教する者の上にとどまった火の舌でありました。

異言の賜物は、神あるいは解き明かしの賜物が与えられた者だけが理解できる「天のことば」と言われることがあります。使徒行伝 2 章で、使徒たちと聞いている者たちと両方が説教されている事、すなわち「神の大きな働き」(使徒 2:11)を理解したと、聖書は明白です。

次に 2 番目の事例を見てみましょう。ペテロがコルネリオと彼の家の者たちに説教をした時のことです。「ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくださった。割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである」(使徒 10:44-46)。

使徒行伝 10:1 は、コルネリオがイタリア人であったと述べています。そしてペテロは、ユダヤ人で、アラム語を話しました。歴史書によると、ローマ人の家に仕える僕たちは世界のあらゆる所の出身であり得ることが分かります。この会見において、言葉の壁があったことは明白です。そのため、ペテロは通訳者を通して説教を始めたかもしれません。しかし、聖霊がコルネリオと彼の家の者たちに下り、ユダヤ人たちとペテロは、この異邦人たちが外国語で話していることを理解することが出来ました。記録によると、ユダヤ人たちはコルネリオたちがその言語で「神をさんびしている」のを聞きました。後にこの経験を教会指導者に報告したペテロは次のように述べました。「聖霊が、ちょうど最初わたしたちの上にくだったと同じように、彼らの上にくだった」(使徒 11:15[強調付加])。

ペンテコステの日に使徒たちの上にくだったと同じように、コルネリオと彼の家の者たちは、異言の同じ賜物を受けたと、ペテロはここで明白に述べています。つまり、彼らは、今まで知らなかった言葉を、他が理解できるように、話したということです。

異言を語ることについての 3 番目で最後の事例はパウロが 12 人のエペソの弟子たちに説教した時のことです。使徒行伝 19:6 は次のように記録しています。「そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくんだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した」。

パウロは使徒たちの中でも最も教育を受け、広く旅をし、多くの言語を話しました(1 コリント 14:18)。聖霊がこれらの 12 人のエペソ人の上にくだったとき、パウロは彼らが新しい言語で預言をしたり、説教をしたりするのを見ました。おそらく彼らは、ローマ帝国の共通語で語ったことでしょう。それが福音を広めるために実用的であったからです。ルカは、彼らが前の 2 つの事例と異なる異言のかたちを受けたと述べておりません。ですからそれはペンテコステで与えられた賜物と同じ種類のものと見なすことが出来ます。

異言の賜物が、聖霊降下と関係しているのは、2つ以上の言語を話すグループが共に集まって、コミュニケーションの壁が出来た時のみであることに、気付かれると思います。

使徒行伝 4 章には 2 章で説明されたのと同じ経験が繰り返されています。その場所は揺れ動き、一同は聖霊に満たされましたが、その場に外国人はいなかったため、異言の賜物は与えられませんでした。使徒行伝 4:31 は次のように述べています。「彼らが祈り終わると、その集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言を語り出した」。

聖霊のバプテスマの目的は、ブツブツとつぶやいたり、ペチャクチャしゃべったり、理解できない音を出すことではなく、説教のための力を持つことです。ですからイエスは次のように言われました。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒 1:8)。

コリントへのメッセージ

パウロによって書かれた 14 の新約聖書の書簡の内、コリント人への第一の手紙は、異言の主題を取り扱う唯一の書簡です。コリントの教会は、異言についての一時的な問題を抱えていました。問題が一時的であったとするのは、コリント人への第二の手紙では、パウロはもう異言について言及することがなかった事から分かります。

古代コリントの都市は、2つの国際海港でよく知られていました。コリントの教会は、多くの異なった国民のるつぼであったので、その礼拝はしばしば、雑然とし混乱した有様でした。教会出席者たちは、他の出席者の知らない言語で、祈ったり、証しをしたり、あるいは説教をしました。そのためパウロは、もし彼らが大多数の人々の知らない異言でしか話せないならば、彼らは、解く者すなわち通訳者がいない限り、静かにしているべきであると命令したのでした(1 コリント 14:28)。すなわち、聴衆が理解できない言語で話すことは礼儀正しくないということです。使徒の次の明白な発言に耳を傾けてください。「だから、兄弟たちよ。たといわたしがあなたがたの所に行って異言を語るとしても、啓示か知識か預言か教かを語らなければ、あなたがたに、なんの役に立つだろうか。また、笛や立琴のような楽器でも、もしその音に変化がなければ、何を吹いているのか、弾いているのか、どうして知ることができようか。また、もしラッパがはっきりした音を出さないなら、だれが戦闘の準備をするだろうか。それと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、空にむかって語っていることになる。…しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たちをも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい。…もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解く(通訳)べきである。もし解く者(通訳者)がいない時には、教会では黙っていて、自分に対した神に対して語っているべきである。」(1 コリント 14:6-9, 19, 27, 28)。

この聖句を用いて、ある人々が礼拝にわけの分からない話をする弁明をすることは実に驚きです。聖書中のパウロの首尾一貫したメッセージは、これとは全く反対のものです。**1テモテ 6:20**で、彼は特に、「俗悪なむだ話(神を冒瀆する、空虚なわけの分からない言葉[欽定訳])」を避けなさいと述べています。そして**2テモテ 2:16**で、パウロはこの勧告を次のように繰り返します。「俗悪なむだ話(神を冒瀆する、空虚なわけの分からない言葉[欽定訳])を避けなさい。それによって人々は、ますます不信心に落ちていく。つまり、語る賜物の目的は思想を伝達することなのです。もし出席者たちが私たちのコミュニケーションを理解出来なければ、静かにしているべきなのです。

天の祈りのことば？

カリスマ派の私の多くの友人たちは、使徒行伝で語られている異言は通常の言語であったことに同意しつつも、第2の賜物、すなわち天の祈りのことばがあると言い足します。彼らの説明によると、この賜物は御霊の「言葉にあらわせない切なるうめき」(**ローマ 8:26**)を表現するものであると言うのです。そしてその目的は、悪魔が私たちの祈りを理解できないようにするためだと言うのです。しかし聖書のどこにも私たちの祈りを悪魔から隠すことを教えているところはありません。悪魔はキリスト者が祈るのを聞くと震えおののくのです。

祈りの言葉の教理は主に**1コリント 14:14**に基礎を置いています。パウロはこう述べます。「もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである」。

この聖句は、パウロが霊の内に祈る時、「天のことば」を用いて、彼自身何を言っているのか分からなかったという意味であると、彼らは解釈します。この理論には大きな疑問が残ります。祈っている人は自分の祈りが聞かれたかをどのようにして知ることが出来るのでしょうか？

ではパウロは**1コリント 14:14**で何を言わんとしているのでしょうか？この聖句を難解なものにしている主な要因の一つに煩わしい訳があります。近代英語で書かれたその聖句を言い直すと次のようになります。「もし私が言葉の内に祈るなら私の周りの人々は理解しない。私は聖霊をもって祈るが、私の思想は、聞いている者たちにとっては実を結ばないものとなる」。パウロは、もし私たちが大声で祈るなら、私たちの周りの人々が理解できるように祈るか、そうでなければ静かにしているかのどちらかであるべきだと主張しました。次の聖句に注目して下さい。「すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう。そうでないと、もしあなたが霊で祝福の言葉を唱えても、初心者の席にいる者は、あなたの感謝に対して、どうしてアメンと言えようか。あなたが何を言っているのか、彼には通じない」(**1コリント 14:15,16**)。この聖句によると、語る者と聞くとどちらが理解できないという問題を抱えているのでしょうか？それは、聞いている者であって、よく教えられているように語る者ではありません。もしあなたが、知らない言葉で祈っている人と一緒に祈るとします。するとパウロが言っているように、祈りの最後にアメン(「そうなりますように」の意)と言うのが困難になります。通訳者がいなければ、

何を同意すればよいかさっぱり分かりません。もしかしたら、悪魔に祝福を求めていたかもしれないのです。

1 コリント 14 章の文脈から、異言あるいは外国語を語ることは、福音を宣べ伝えることであり、それによって教会の徳を高めることであることは明白です(5 節)。もし聞いている人々が語られている言葉を理解しないならば、彼らの徳は高められません。その結果、もし通訳者がいなければ、語る者はただ空に向かって語っているだけで、語られている事を知っているのは神ご自身だけです。これが、よく誤って引用される **1 コリント 14:2** 節の明確な意味です。「異言を語る者は、人にむかって語るのではなく、神にむかって語るのである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである。」

パウロは、語られる言語は聞く者によって理解される必要があると再び強調します。もし通訳者がいなければ、福音の奥義を他に伝えたい者は、自分と神との間の静かな瞑想を持つ必要があると述べています。「それと同様に、もしあなたがたが異言ではっきりしない言葉を語れば、どうしてその語ることがわかるだろうか。それでは、空にむかって語っていることになる」(**1 コリント 14:9**)。「もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対した神に対して語っているべきである」(**1 コリント 14:28**)。明らかに、異言の大きな目的は、言語の壁を乗り越えて、福音を伝えることなのです。

ある人々が次のように尋ねたことがありました。「パウロは御使たちの言葉(tongues[異言])を語ったのではなかったのか？」(**1 コリント 13:1** 参照)。

いいえ。パウロはこう言いました。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、…」(**1 コリント 13:1**)。この聖句の文脈を見ると、「たとい」という言葉が「たとえ…だとしても」という意味であることが分かります。例えば、2 節でパウロは「…山を移すほどの強い信仰があっても…」と言いましたが、彼は山を移したことはありませんでした。更に 3 節では、「…自分のからだを焼かれるために渡しても…」とありますが、彼は火刑ではなく斬首刑で殉教しました。このように、パウロはここで、「たとえ…だとしても」という意味で、「たとい」という言葉を用いました。

重要度の正しい順序

異言の賜物を含む全ての霊の賜物は今日の教会に必要であり得られるものであると、私は信じております。しかし聖書は、ある賜物は他の賜物よりも重要度が高く、そして最も重要なものに集中するようにと教えています。「だが、あなたがたは、更に大いなる(最高の[欽定訳])賜物を得ようと熱心に努めなさい」(**1 コリント 12:31**)。

実は、聖書が霊の賜物のリストを挙げる時、たいてい異言はリストの最後に挙げられています。「そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた」(1 コリント 12:28)。「教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている」(1 コリント 14:5)。

しかしあるカリスマ派の説教者たちは、このリストの順序を逆にして、異言の賜物をその説教中の最も重要なものとして強調します。彼らは、異言を語らないクリスチャンは二流のクリスチャンであるという印象を与えることでしょう。しかしパウロは異なった人々に異なった賜物が与えられると言う事を明瞭にしています。そして誰も、全ての賜物を持つことは期待されていません。パウロは 1 コリント 12:29, 30 で次のように問いかけてました。「みんなが使徒だろうか。みんなが預言者だろうか。みんなが教師だろうか。みんなが力あるわざを行う者だろうか。みんながいやしの賜物を持っているのだろうか。みんなが異言を語るのだろうか。みんなが異言を解くのだろうか」。答えは、明らかに「いいえ」です。

聖書はこう述べています。「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制である」(ガラテヤ 5:22, 23)。しかしこれらの説教者たちは、御霊の実は異言であって、聖霊に満たされた者はみな異言を語るようになるという印象を与えることでしょう。しかし神が神の民を聖霊で満たしたという聖書の 50 箇所内の事例の内、たった 3 つだけが異言と関連した経験です。

さらに、イエスが私たちの模範です。彼は聖霊で満たされていましたが、異言を語ったことは一度もありませんでした。バプテスマのヨハネも「母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされておりました」(ルカ 1:15)。しかし彼が異言で語ったことの記録もどこにもありません。

新約聖書の 27 書簡中、3 書簡だけが異言の賜物について言及しています。聖書記者は約 39 人です。その 39 人中、3 人だけ、すなわちルカ、パウロ、そしてマルコだけが異言の主題に触れていません。言い換えるならば、私たちは神が強調を置かれるところに強調を置くべきです。

独創的な偽物

本物の異言の賜物は福音を宣べ伝えるための強力な手段です。しかし悪魔は神の全ての真理に対して偽物を持っています。

「グロソラリア」とはカリスマ諸教会で普及している体験を説明するために用いられる言葉です。アメリカンヘリテージ辞書によると、「組み立てられた、意味のない言葉。特に恍惚状態または一定の精神分裂病候群と関連した言葉」と定義されています。

同じ辞書で、「言語」の定義を見てみましょう。「人間が、思想、感情などを表現したり伝達したりするために、系統だった組み合わせや型で、音声またはこれらの音を表す書かれた文字を用いること」。定義によると、グロソラリアの支離滅裂な音は言語ではありません。

私はこの慣習を何度も見てきました。私の通っていたあるカリスマ派の教会では、牧師とその夫人が「異言チーム」でした。毎週、牧師の説教の途中で彼の夫人が跳び上がって、空中に腕を振り回して、急に恍惚とした発声をしました。しかし、彼女の語ることはいつも同じでした。「ハンダ・カラ・シャミ、ハンダ・カラ・シャミ、ハンダ・カラ・シャミ、…」これを何度も何度も繰り返すのです。私には、直ぐにこれが疑わしいものに見えました。なぜならイエスが次のように言われたからです。「また、祈る場合、異邦人のように、くどくど(use not vain repetitions 空虚な繰り返しを用いて[欽定訳]) 祈るな」(マタイ 6:7)。

このことが起こる度に、その牧師は説教を止めて、いわゆる「メッセージ」と呼ばれる、疑わしい英語の通訳を語りました。たいていそれは、「主はこう仰せられる」で始まりました。しかし彼女が「ハンダ・カラ・シャミ」という言葉をいつも繰り返していたにもかかわらず、牧師の紛らわしい通訳は毎回異なったものでした。ある時にはその発声よりも3倍長いものでした。私は、もしこれが神からのメッセージであるなら、なぜ神は初めから英語でそれを与えて下さらないのだろうと不思議に思っていたものでした。

キリスト教に扮装した異教

このカリスマ派「異言チーム」に出会い、私は若いころ歴史書で読んだある事を思い出しました。この近代の異言の現れは、実は聖書に端を発するものではなく、古代の異教の心霊術的儀式から始まったものです。紀元前6世紀に、都市国家デルフィの神託はパルナツス山のふもと近くに建てられた神殿に収められました。デルフィは、豊穡とブドウ酒と官能的ダンスの神、ディオニューロスにとって神聖な場所であり、また文芸、音楽の保護女神たちであるミューゼス九姉妹にとっても神聖な場所でした。

浮き浮きさせる音楽が演奏される中、ピューティアーという名の女司祭長は、酔わせる蒸気を吸って、熱狂した恍惚状態に入り、ペチャクチャしゃべり始めるのでした。女司祭のボソボソ言う異様な音声は、司祭が韻文で語ることによって解き明かされました。彼女の発声はアポロの言葉と見なされました。ところがそのメッセージは、誤りであることがめったに証明されないほど、曖昧なものでした。

ニューメキシコ州のアメリカ先住民と共に暮らしていた頃、私は似た儀式を数回目撃したことがあります。アメリカインディアンは、幻覚を起こさせるペヨーテと呼ばれるサボテンの一種を食べ、輪になって座り、歌いながら何時間もドラムをドンドンとたたくのです。間もなく、苦痛な幻を体験しな

がら、幾人かが発作的にボソボソつぶやきました。今日カリスマ派の教会は、アメリカ先住民にとって、他の教会よりもはるかに人気があります。それは彼らの古い宗教からの移行がそれほど簡単で自然だからです。

異教のアフリカ部族の中の多くの人々は、神々の祝福を祈願するために、鶏あるいは山羊を犠牲に捧げ、それから、ドラムをたたいて催眠術のリズムで歌いながら、何時間も火の周りで踊ります。やがてある者たちは神々に取りつかれて、霊界の不気味な言葉を話し始めます。すると、地元の魔法使いあるいは司祭がそのメッセージを解き明かします。この儀式は今日もなお西インド諸島のブドゥー教のカトリック教徒の間で行われています。

この異教の慣習は初め、1800年代初期に北アメリカのキリスト教会へ入ってきました。アメリカへ連れてこられたアフリカ人奴隷の多くはキリスト教を強制的に受け入れさせられましたが、自分で聖書を読むことが出来ませんでした。彼らはアフリカのさまざまな民族出身でしたが、ほとんどの民族に共通した一つの慣習が、「霊に取りつかれた」人のボソボソとつぶやきながらの「霊のダンス」でした。

奴隷たちはこの慣習を誤ってキリスト教徒の「異言の賜物」と関連付けて考えました。そして、その修正版を彼らの集会の中に取り入れ始めました。激しいリズムの音楽を伴うこのような狂気じみた礼拝が初め南部で広がり初めました。その参加者は、「ホーリー・ローラー(Holy Rollers)」と呼ばれて、主流な諸教派によってあざけられました。ある者は、自分が「霊」をもっていることを証明するとして、取りつかれた恍惚状態の間に毒蛇をつかむことさえしました。(これは、「へびをつかむであろう」と述べている**マルコ 16:18**の誤用でした。これはパウロが事故でへびにかまれても毒から無事であった出来事に関連したものでした。**使徒行伝 28:3-6**を参照下さい。)自分が聖霊をもっていることを証明するために、死に至らせるような蛇を追い詰めてつかむことは、事実上、神に挑戦していることです。

白人間のペンテコステ運動の国内の広がりは、1906年にロサンゼルスのアズサ・ストリートでアポストリック・フェイス・ゴスペル・ミッションによって始まりました。ウィリアム・シーモアという黒人で元ホーリネス教会の牧師が指導者でありました。そこから指導者たちはその教理に磨きをかけて、他の主流なキリスト教派に、より魅力的で受け入れやすいものにしていきました。

そして1960年頃にカリスマ運動が始まり、伝統的な諸教派の中の信者たちを魅了しました。その時から今日まで爆発的な成長を続け、世界中のプロテスタント及びカトリック教会に数百万ものカリスマ派がいます。

グロソラリアを行う全ての異教において音楽の果たす顕著な役割に留意することは重要な事です。この偽物の異言の賜物はまず、キリスト教に扮した異教の音楽と礼拝様式を通して、主流の諸教会に足場を見出しました。主要的で反復性リズムやシンコペーションのリズムが、高い理性の力

を弱め、潜在意識を催眠状態に陥れます。このような攻撃されやすい状態で、恍惚とした発声の霊は侵入しやすくなります。

今や悪魔は、偽物の異言の賜物を用いて、トロイの木馬のように、異教の礼拝様式をキリスト諸教会に、恐るべき成功度で導入します。サタンは、クリスチャンの注目を信仰から感情へ移し変えようと望みます。あるカリスマ教会は、「聖書は古い手紙で、異言から来たメッセージは聖霊の新鮮な啓示である故、より信頼できる」と言うほどまでになっています。

このように、今舞台はサタンの最後の働きの為に設定されています。

神の霊は私たちに何をなさるか

「霊の内に殺された(笑いこけさせられた)」人は地に倒れて転げまわり、ブツブツとつぶやくべきであるという概念は、聖霊を侮辱することです。神が私たちに聖霊を与えて下さる理由は、私たちの内に神のみかたちを回復させることであり、私たちから品位と自制を奪い取ることではないのです。

カルメル山でバアルの預言者たちが祭壇の上を飛び跳ねたり、叫んだり、うめき声をあげたりしました。彼らは預言したり自分の身を傷付けたりしました。対照的にエリヤは静かにひざまずいて単純な祈りをささげました(王上 18:17-46)。

「神は無秩序の神ではない(1コリント 14:33)。無秩序な状態は、神に責任があるのでないとすれば、誰に責任があるのでしょうか？」

聖霊を受ける時に自制を失うという考えは、聖書と調和していません。「預言者の霊は預言者に服従するものである」(1コリント 14:32)。

別の適切な事例があります。イエスが悪霊につかれた狂人を海の側で救われたとき、癒された男は「着物を着て、正気になってイエスの足もとにすわってい」ました(ルカ 8:35)。神は次のように招いておられます。「主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう」(イザヤ 1:18)。神は私たちが知性を用いることを望んでおられます。

この研究をお読みになっているある方々はきっと次のように考えておられることでしょう。「よくまあこんなことを言えるもんだ。私は何年も異言を語ってきたし、これは神からのものであると知っているのだ」。クリスチャンとして、私たちは決して自分の感じ方に結論の基礎を置くべきではありません。悪魔は、私たちに気持ちの良い感じを与えることが出来るのですから。私たちはむしろ、確

実な神のみ言葉の上に信仰の基礎を置かなければなりません。

友人の一人は、異言をしばしば語る活動的なカリスマ派の者でした。彼がこれらのことを研究したとき、この「賜物」が正しい霊からのものかどうか疑問を持つようになりました。そこで彼は心から次のように祈りました。「主よ、もしこれがあなたの御心でないなら、そして私が本当の異言の賜物を経験していないのなら、どうぞこれを私から取り去って下さい」。その日からグロソラリアの経験は二度と戻って来なかったと、彼は私に言いました。真のクリスチャンは、心に抱く全ての考え方や習慣を神の御心の祭壇の上に喜んでささげるべきです。他のクリスチャンの間でいかに人気があり、受け入れられ、愛されていても、疑わしい慣習は捨てるべきであります。ある事柄は「人々の間で尊ばれ…、神のみまえでは忌みきらわれ」ます(ルカ 16:15)。

バビロンから出る

異言の問題について理解することはなぜ今日の私たちに不可欠なのでしょう？近代のカリスマ運動は聖書の預言にあらかじめ記されていたと信じております。

黙示録 18 章は次のように記されています。「彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた』。…わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ』」(黙示録 18:2, 4)。

私たちはバベルの塔における古代バビロンの主要な特質が言葉の混乱であったことを覚えていなければなりません(創世記 11:7-9)。黙示録は、最後の時代に神の民がバビロンとその混乱した偽物の宗教制度から出てくるように招かれていることを教えています。

「また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。」(黙示録 16:13)。「口から」という表現は言葉を表しています。かえるの一番の武器はその舌であるということも忘れてはなりません。汚れた舌とは何か？神は私たちに何かを教えようとなさっているのかもしれませんが。バベルでの言葉の混乱は、聖霊の祝福ではなく、むしろ反逆の災いでした。「バベリング(英語で『ペチャクチャしゃべる』の意)」という言葉はバベルからとった言葉です。ペンテコステにおいてバベルの災いは、人々が福音を理解できるという祝福へと変わりました。

服従する者に与えられる

異言を語ったので聖霊のバプテスマを受けたと主張する人々に私は会った事があります。しかし

彼らは、片手にタバコを持っており、もう片方の手にはビールを持っていました。ここで正しく理解しておきましょう。聖霊の最も尊い賜物を受けるための基本的な要求事項があります。

イエスは言われました。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である」(ヨハネ 14:15-17)。

「わたしたちはこれらの事の証人である。神がご自身に従う者に賜った聖霊もまた、その証人である」(使徒 5:32)。

数年前、有名なテレビ伝道者たちが途中で倒れてしまいました。彼らは皆聖霊で満たされ、霊の賜物をもっていると主張していました。しかし、不道德な不従順に生活していました。彼らはテレビで異言を語り、それからスタジオを去って、妥協した生活を送るのでした。何かがおかしいのです。私は不思議に思いました。「もしこれが本物の異言の賜物であれば、これらのカリスマ伝道者はなぜ外国で説教するときに通訳者が必要なのだろうか？」

神はなぜ聖霊をお与えになるのでしょうか？「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、…わたしの証人となるであろう。」(使徒 1:8)。神はブツブツつぶやく霊を与えずに、証しをする力を授けて下さるのでしょうか？

私たちはどのようにして本物の聖霊の賜物を受けることが出来るのでしょうか？全的に神に屈服し、喜んで他を赦し、神に従い、そして求めることです。はこう述べています。「このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか」(ルカ 11:13)。